

2019 年 3 月 3 日（日）「神より出でしダビデの子」

マタイ 22:41-46

41 パリサイ人たちが集まっているときに、イエスは彼らに尋ねて言われた。42 「あなたがたは、キリストについて、どう思いますか。彼はだれの子ですか。」彼らはイエスに言った。「ダビデの子です。」43 イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは、御霊によって、彼を主と呼び、44 『主は私の主に言われた。『わたしがあなたの敵をあなたの足の下に従わせるまでは、わたしの右の座に着いていなさい。』』と言っているのですか。45 ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうして彼はダビデの子なのでしょう。」46 それで、だれもイエスに一言も答えることができなかった。また、その日以来、もはやだれも、イエスにあえて質問をする者はなかった。

【序論】

今日でマタイ 22 章が終わることになりますが、15 節から続いてきた主イエスと敵対者との間の四つの問答の最後になります。念のために整理をしておきましょう。

- ①15-22 節「税金」
- ②23-33 節「復活」
- ③34-40 節「最も重要な律法」
- ④41-46 節「ダビデの子」

ただ、今回は今までの問答とはちょっと性質が異なる面があるのです。これまでの三つの問答はすべて敵対者から投げかけられたものでした。しかし、今回は敢えて主イエスの方からパリサイ人に投げかけておられる。更に、この「ダビデの子」に関する問答は、もうこれ以上議論の余地がないほどに、両者の関係を決定的に引き裂くものとなるのです。その証拠に 46 節は「**それで、だれもイエスに一言も答えることができなかった。また、その日以来、もはやだれも、イエスにあえて質問をする者はなかった**」と締めくくられています。これは、主イエスの知性に太刀打ちできないことを敵対者たちが認めたとも言えますが、同時に主イエスに対する殺意が極まったと読むこともできる。「**一言も答えることができなかった**」というのも、本来答えが分かっていたけれど、敢えて口にできない事柄を主イエスが言わせようとしているので、黙らざるを得なかったのでしょう。一見何でもない問答に見えますが、この背後には主イエスとパリサイ人の間でせめぎ合う炎が見える。彼らの沈黙はかえって不気味です。

【本論】

本論 1. 「ダビデの子」が持つ響き

パリサイ人たちが集まっているときに、イエスは彼らに尋ねて言われた。「あなたがたは、キリストについて、どう思いますか。彼はだれの子ですか。」彼らはイエスに言った。「ダビデの子です。」(22:41-42)

この問いは、これまでの三つの問答にぐうの音も出なくなった敵対者に追い打ちをかけるものです。主イエスはキリストとは誰の子であるかという問いを投げかける。主はあくまでも「キリスト」を第三者的に取り上げ、ご自分がキリストであると主張しているではありません。この問いに対する答えは予想できるものでした。パリサイ人が答えているように「ダビデの子」という回答が出ざるを得ないのです。

当時ユダヤ人の間で待ち望まれていたメシヤ(キリスト)には、大きく分けて二つのイメージがありました。第一に、ユダヤの迫害者を一掃する政治的・武力的救世主であります。中間時代には、ユダヤ宗教を守るために敢然と立ち上がった人物が幾人か現れました。シリアの王アンティオコス4世(エピファネス)がユダヤを強行的にヘレニズム化しようとした(宗教的冒瀆を伴う)のに対し、マカベア家の祭司マタテヤはゲリラ戦を指導して反乱を興しました。その息子のユダ・マカバイオスは、父の遺志を継いでシリア軍を打ち破り、エルサレムから撃退して神殿礼拝を取り戻しました。このユダヤの英雄たちは民衆に「この人こそメシヤではないか」という期待を与えたのです。しかし、このユダ・マカバイオスもシリアの再度の侵入の時に殺されました。このような歴史の流れの中で、ローマ帝国による支配を打ち破るメシヤが期待されたのは頷ける話でしょう。人々がイエスを王に祭り上げようとしたのは(ヨハネ6:15)、生活苦からの解放と、穢れなきユダヤ宗教を取り戻すためだったのです。よって、民衆がイエスを「ダビデの子」と呼ぶ時には、多くの場合「政治的解放者」という響きがあります。



第二に、バプテスマのヨハネが抱いていたようなメシヤ観、即ち人類史を一挙に終わらせてしまう審き主としてのメシヤのイメージです。この方が来られると悪は一掃され、火による審きがもたらされる。そういう恐るべき方の来臨に備え、ヨハネは懸命に悔い改めのバプテスマを宣べ伝えたのです。そして、ヨハネのメッセージに多くの人が呼応したということは、民衆の間でも同様のメシヤ観が広まっていたことを表しているでしょう。彼らはヨハネの宣教に深く共鳴したのです。

パリサイ人の「ダビデの子」という返答には、これら二つのメシヤ観が混在していたと思われます。とはいえ、彼らの中にも旧約聖書に基づく理解があった。それは、メシヤがダビデの子孫として、その家系から生まれるということです。

キリストはダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘムの村から出る、と聖書が言っているではないか。（ヨハネ 7:42）

これが当時の一般的な認識だったのです。ダビデ王の子孫として、ダビデの出生地であるベツレヘムで生まれると。事実、主イエスはその通りの出生を遂げ、「ダビデの子」と呼ばれるにふさわしい人物でありました。

本論 2. ダビデが待ち望んだメシヤ

イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは、御霊によって、彼を主と呼び、『主は私の主に言われた。『わたしがあなたの敵をあなたの足の下に従わせるまでは、わたしの右の座に着いていなさい。』』と言っているのですか。ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうして彼はダビデの子なのでしょう。」（22:43-45）

この問いはやや謎めいていますが、ダビデ自身が語ったとされる詩篇 110 篇の聖句を引用しておられます。

主は、私の主に仰せられる。「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。」（詩篇 110:1）

ここではダビデが、（父なる）神様が（御子なる）イエスに語りかけている言葉を書き留めています。ヘブル語原文では「主（ヤハウェ）は私の主（アドナイ／主人）に言われた」という言葉の使い分けがなされている。つまり、ダビデ王にとって「主人」と呼ぶべきお方がいる。その方は神的でありながら、父なる神様とは別人格の存在である。この第二の人物を、主イエスの時代のユダヤ人はメシヤだと理解していたのです。このメシヤは「ダビデの子」と呼ばれる。ところが、ダビデは自分の子孫のことを「わが主」と呼んでいる。通常、子孫を「主」とは呼ばない。この矛盾をどう説明するか。

これは一見、学問的な問いに見えます。しかし、主イエスはこのような言い方をして、ご自分こそがそのメシヤであると暗に宣べておられるのです。しかも、その人物は只者ではない。神の右の座に就き（右の座とは、栄誉の座、人格において完成した者が坐る特別な場所）、すべての悪が滅ぼされた後、神の国を統治する人物として描かれている。主イエスはあくまでも第三者的にこの「メシヤ」について語るのですが、言外に「それはわたしだ」と言っているのです。そして、パリサイ人たちも主イエスの意図を読み取ったことでしょう。

本論 3. メルキゼデクの位に等しい大祭司（ヘブル 5 章）

さて、それでは主イエスとは一体如何なる人物なのか。もう一度整理をしておきましょう。主イエスは人間としては（家系的には）確かに「ダビデの子」であり、ある意味において人々が待望していたメシヤとしてのアイデンティティを保有しておられます。しかし、主イエスにはもう一つの顔がある。それは、その背後に隠された「神の子」としてのアイデンティティであります。主は確かにマリヤからお生まれになった。しかし、その父親は地上には存在しないのです。神の霊によってマリヤは身ごもり、主イエスは天的家系に属する者としてお生まれになった。つまり、人間的な意味における「ダビデの子」という小さな枠組みに収まるような人物ではなく、とてつもないスケールの、「神の国」との繋がりを持つメシヤなのです。ヘブル 5 章には、主イエスを神から出た大祭司として描く重要な聖句があります。

大祭司はみな、人々の中から選ばれ、神に仕える事がらについて人々に代わる者として、任命を受けたのです。それは、罪のために、ささげ物といけにえとをささげるためです。彼は、自分自身も弱さを身にまとっているのも、無知な迷っている人々を思いやることができるのです。そしてまた、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のためのささげ物をしなければなりません。まただれでも、この名誉は自分で得るのではなく、アロンのように神に召されて受けるのです。同様に、キリストも大祭司となる栄誉を自分で得られたのではなく、彼に、「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。」と言われた方が、それをお与えになったのです。別の個所で、こうも言われます。「あなたは、とこしえに、メルキゼデクの位に等しい祭司である。」キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び、完全な者とされ、彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となり、神によって、メルキゼデクの位に等しい大祭司ととなえられたのです。（ヘブル 5:1-10）

メルキゼデクとは、創世記 14 章でアブラハムを祝福するために現れた謎の王です。「シャレムの王」（創世記 14:18）と書かれているものの、なぜこの人物が急に登場したのかもよく分からない。そして、彼は「いと高き神の祭司」と呼ばれる。私が習った旧約学の先生は、メルキゼデクは受肉前のキリストの可能性もあると仰っていました。

ヘブル書の著者は、イエスとは地上のどの家系にも属することのない神の大祭司だと言うのです。通常、大祭司というのはレビ部族のアロンの家系に属する人が任命されました。この人間の家系から出た祭司は、自分の罪のための犠牲をささげなくては神の前に

出ることができません。しかし、「メルキゼデクの位に等しい大祭司」は、罪なく完全であるため、まったく憚らず神の御前に出ることができる。そして、何と、その大祭司は自らを完全な犠牲として神にささげたというのです。

今日の箇所、主イエスはパリサイ人に、暗にご自分の出所が天であるということを認めさせようとしているのです。神から出た大祭司であり、すべて罪を持つ人間を神の御前にとりなすことのできる唯一のメシヤであると。

【結論】

最初にも申し上げましたように、パリサイ人たちはある程度主イエスの言わんとしていることを理解したと思います。理解したということは、その人に選択が迫られるということです。単純な二者択一です。この神からの大祭司を信じるか否か。そして、この問いはすべての聖書読者にも投げかけられている。パリサイ人の沈黙は、彼らの殺意を表しているでしょう。「このイエスという男は自分のことをこれほどの者だと宣言しやがった」「冒瀆だ」。彼らの判断は、イエスを認めない方に倒れました。私たちにも同様の問いが迫ってきています。ナザレのイエスを神から出た大祭司として認めるかどうかです。認めた人には信仰告白が求められます。そして、自分の永遠をこの方に委ねるのです。なぜなら、主イエスを置いてほかに、私たちを罪から贖い得る存在はないからです。この後、賛美の後に使徒信条を唱えます。偽りなき心で私たちの信仰告白を言い表しましょう。

【祈り】

永遠の大牧者、大祭司なるイエス様。あなたこそ礼拝されるべき神です。私たちはあなたに対して心からの信仰を表明します。私たちを罪から贖い給う主よ、私たちの人生があなたを否定するものとなりませんように。主を愛し、主に従い抜く人生を歩み抜かせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

永遠より、御子イエスと共に世を統べ治め給う、父なる神の愛。

メルキゼデクの位に等しい大祭司として、ご自身を父に献げ給うた、小羊イエス・キリストの恵み。

ダビデの裔なるイエスに、信仰と献身とをささげさせ給う、聖霊の親しき交わりが、我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。